

逓信省創設140年特集

郵便博物館の成立

田良島 哲

1 はじめに

郵政博物館の起源となる「郵便博物館」は、1902年（明治35）6月に万国郵便連合加盟25周年を機に正式に開館した。『逓信博物館五十年史』（以下『五十年史』）では、1892年に業務用物品や郵便切手類の改良の参考とするために逓信省内に「参考品室」を設け、ここでの収集が順次拡大して、博物館の設置に至ったと説明されている⁽¹⁾。

ただ、業務改良のための物品収集が、どのような経過で博物館という施設に結びついたかは、『五十年史』では明確に述べられていない。逓信省本省の史料は関東大震災で失われた部分が多いと見られ、この点を同時代の公文書等から明らかにすることは、困難かと考えられる。本稿では、逓信省や関連団体から刊行された公報や雑誌を主な素材として、逓信事業関係者の中で共有された「郵便博物館」に対する意識を読み取ってゆく。さらに、残されている開館準備時の陳列品原簿や開館時の展示の内容から、資料を収集した館側がコレクションにこめた意図を探ってみたい。その上で、この時代の博物館界全体の動向をあわせ検討することにより、郵便博物館成立の歴史的な位置付けを考える。

以下の叙述で史料の引用にあたっては、漢字を現行通用の字体に、片仮名書きを平仮名に改めたほか、仮名の濁点を付し、文章中に句読点を補った。

2 西欧の郵便博物館に関する知見

『五十年史』は、博物館の起点を1892年の参考品室の開設に充てているが、西欧の郵便事業に関する博物館の状況については、さらに早い時期から情報が入っており、逓信省関係者の間で、博物館設立の必要性を認めていた様子がうかがえる。

特に日本の逓信関係者に大きな影響を与えたと思われるのが、ベルリンにあったドイツ帝国の郵便博物館である。1872年の創立になるこの館は、新興ドイツ帝国の逓信行政を担った帝国郵便長官ハインリッヒ・フォン・シュテファン（1831-1897）の施策の一つで、郵便を主題とした博物館のさきがけであった。すでに、1884年の『交通公報』第4号には、「日耳曼帝国柏林府郵便博物館出品目録抄訳」という記事が掲載されている。この記事は19世紀のドイツ及び欧州諸国に関する同館の展示内容を解説したものである⁽²⁾。表題に「第十九世紀以前の出品については万国郵便雑誌第十号を見るべし」という注釈があるところから、万国郵便連合の機関誌“*Union Postale Magazine*”掲載の記事を抄出、翻訳したと推測される。文章による解説は

1 逓信博物館編『逓信博物館五十年史』1952、p. 4。

2 「日耳曼帝国柏林府郵便博物館出品目録抄訳」、駅通局総官房取調科 編『交通公報』第1-8号、駅通局、明17.5-12。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/805180>（参照 2025-11-27）

やや冗長なので、展示区画ごとに主題と内容を表にまとめてみた(表1)。すでにこの時期から、通信省内で郵便を主題とする博物館に関心が寄せられていたことが、うかがえる。

『五十年史』には、郵務局長因藤成光が郵務局次長在任中の1891年にウィーンで開かれた万国郵便連合の会議の委員として渡欧した際に、フォン・シュテファンの案内でベルリンの郵便博物館の状況を目にする機会があり、日本の博物館創設にも尽力したと述べられている⁽³⁾。彼が帰国後、国内の郵便関係史料の収集を計画したことは、次のような記事からもうかがわれる。

東京郵便電信局長因藤成光氏は、今度我邦郵便開始以来に関する器具機械式紙衣服の類は勿論、取扱の様式図式等に至る迄、苟も郵便の沿革変遷の概要を知るに足るべき物品を蒐集し、以て永く後世の参考に供し置かんとの計画をなしたるが、既に二十有余の星霜を経過したる今日なれば、其蒐集も一朝に成り得べからざるのみならず、同局は一度火災に罹りたるともあれば、其困難も一入なりと。(中略) 庶幾くは全国四千有余の各局に於て其参考史料と為るべき器具式紙等の存するあらば、空しく筐底に蠹腹を肥さんより、之を中央に蒐集して一大参考館を起こさしめんと(下略)⁽⁴⁾

(19世紀ドイツ帝国)			
	甲区	郵便に関する建家	郵便・電信に関する建築模型(50分の1)53個
	乙区	真の郵便事務に用いたる物品	郵便局で使用する庄字板・官印・権衡・私書函・郵便局受付窓の模型
	丙区	役服	郵便官吏等の着用する各種の制服
	丁区	尋常の道路に用うる郵便馬車及び馬具	郵便馬車の模型
	戊区	郵便局借切鉄道汽車の模型	二軸車1両・三軸車2両・車室の模型
	己区	汽船	汽船模型(50分の1)・函書・函面
	庚区	軍用郵便の機械一式	馬具等模型(実物大)・車両等(6分の1)
(19世紀外国郵便)			
		スイス	ゴッタルド郵便、アルプス郵便など過去の郵便に関する画図、写真
		フランス	19世紀の郵便通送を示す石版画・軽気球郵便・伝書鳩郵便の書状や函書
		英国	鉄道敷設以前の郵便を示す彩色図や石版画・郵便馬車の摸形・馬車による郵便を示す絵画・郵便帆船の摸形
		スペイン	旅客馬車の絵画・郵便通送人を描いた絵画

通信省駅通局駅通給官官房取調科編纂『交通公報』第4号、明治17年8月所収「雑誌」
○日耳曼帝国柏林府郵便博物館出品目録抄訳 から要約。

表1 ベルリン郵便博物館 19世紀の郵便・交通に関する展示構成

3 『通信博物館五十年史』p. 30。

4 『交通』6(60)、交通雑誌社、交通学館、1893-06。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1539076> (参照 2025-11-27)

また、後に通信大臣を務める田健治郎は、1896年にブダペストで開催された国際電信会議委員として出張した際、欧州各国を歴訪しているが、その際にもベルリンの郵便博物館を訪問した。滞欧中の日記に、次のような記述がある⁽⁵⁾。

(1896年9月)十六日 陰時々少雨 温六十六度。午前十時テーパーランド氏と伴ひ、郵便博物館(ポスタルミュージアム)を観る。館は郵政庁中に在り。先づ郵便室を観る。各国郵便事務に属する器具器械船車馬畜等の模形物、一として備はらざるなし。就中、汽車汽船の模形の如きは一個にして一万六七千馬克を費やしたるものあり。英国の汽車急送中に於ける郵便行囊授受機の如き、印度熱帯地の郵便汽車の如き、米国長距離に用ゆる郵便汽車の如きは、其構造皆特に長ずる所あり。独逸の郵便汽車は嚮きに埃利亜に於て実見せしものと略同一なり。

次に電信室を観る。新古電信電話に属する通信器は勿論、電気的作用より起る各種の通信信号器及び電気以外の信号器も亦悉く備はる。而して電気を応用すべきもの、若くは水力或は圧気或いは瓦斯を応用すべきものは、悉く皆之を引込み置き、直ちに実際の活用を為し得べきの装置を設けたり。一大蘇音器あり。曩に我小松宮来観の時挨拶せられたる蘇音管を取り、之を器械に装置したるに忽ちにして殿下仏語の音吐朗々として目前に在ますが如し。予亦蘇音管に向て日本語にて一応の挨拶を為したるに、守管者は直ちに器械に掛けしに四五十間を隔つるも、明かに之を聴取るを得べし。亦活動写真幻灯器あり。郵便吏活動の体、毫も実際に殊ならず。

此郵便博物館は其材料の蒐集に付、既に二十五年の力を費やせしと云ふ。郵便電信器具器械改良発達の為め鮮からざる裨益を与ふるや疑ひなし。現に現在庁舎の隣地枢要の場所を撰み、新郵政庁建築中にして最早落成近きに在り。移転の後は玄関正面の一大円堂及其周囲を以て博物館に充用するの計画なりと云ふ。

もう一つ興味深い論点を取りあげた記事を示そう。「郵便の美術」と題する『交通』への投稿で、著者は「在独逸 孤松逸人」と称している。当時、ドイツに滞在していた通信省関係者と見られるが、個人の特定には至っていない⁽⁶⁾。

著者は、ヨーロッパの郵便事業や職員が、しばしば同時代の美術や文学にとりあげられ、郵便馬車や郵便喇叭といった事業に関わる要素が、「或は図画に、或は詩歌に、或は音楽に」描かれて、称賛されることに注目する。そして、郵便事業に携わる「集配逋送人」が、よろこんでその職に従事しているのは、職務規則の厳格さや給与などの優遇だけでなく、「美術的思想」が彼らの心を「優美篤実」にしているのだ、という。すなわち、事業に従事する人々が絵画や詩歌などの芸術的視点から称揚されることが、彼らの職務への誇りや忠誠につながっている、と認識しているのである。そして、自分の論旨を疑うのであれば「来りて伯林郵便博物館を一覽せよ」と主張する。

通信事業を単に行政事務や産業の側面だけでなく、文化的要素を含めて認識するべきだという視角を、当時の西欧の状況を見た日本人官僚が持ったことは、注目される。同時にその成果が博物館に集約されている、という観察も示唆的である。

5 田健治郎 著『鵬程日誌』、田健治郎、明31.2。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/761739> (参照 2025-11-27)

6 孤松逸人「郵便の美術」、『交通』5(48)、5(49)、交通雑誌社、交通学館、1892-12。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1539064>、1539065 (参照 2025-11-27)

3 郵便博物館に関する議論と構想

逓信省の幹部が、西欧での体験の中で博物館の存在意義を実感するとともに、通信事業に携わる実務家の間でも、さまざまな社会的要因から日本国内における博物館の必要性を論じる者が現れてきた。以下、主に『交通』掲載の論考や記事によりながら、議論の流れを概観する。

1894年3月に「天野生」なる人物が、「郵便事業に対する希望」と題する三項目の提言を投稿しており、「書留郵便物の賠償」「郵便代筆所の許可」と並んで「郵便博物館の開設」が掲げられている⁷⁾。

一、郵便博物館の開設

米欧諸国に郵便博物館あり。郵便事業に関する物品を陳列して以て公衆の観覧に供し、或は毎年々報案内書等を公布し、或は其他種々の手段を用ゐて其事業の性質状況等を世人に公示するは、世の夙に熟知せる所なるべし。聞く、欧米諸国人民の如きは常に鋭意郵便局の一挙一動に注目し、郵便吏員の如き亦至るところ世の敬する所たりと。余輩此に於てか知る、彼国の郵便事業が益々増進して底止する所なき、又決して偶然に非ざるを。見よ仏国の如きは小学児童の教科書として、尚郵便電信読本を使用するに非ずや。由此觀之、郵便事業の性質状況等は弘く之を開放して、本業務に対する公衆の智識を開発せしむるは、郵便局適當の義務と云ふべし。殊に我国の如き本事業開設以日尚浅く、世人多くは未だ今日郵便局当然の機関に通ぜず、況んや交通の本義に於てをや。左れば彼等の之を目する、猶三十年前の飛脚を以てし、充分の信用を郵便局に置かざるもの又少しとせず。今日の形勢、余輩猶ほ斯の如き徒の往々にして之れ有るを見る。夫れ郵便事業の盛衰は國家の消長に關す。然るに世人の多くは之に対する如此に至ては、余輩何ぞ慨嘆せざるを得んや。故に余輩は、我政府に於ても本事業の性質状況を一般世人に了知せしむるの一手段として、逓信省若くは郵便局内の一部を假りて郵便博物館を開設し、郵便に関する諸般の器具機械式紙、切手、郵便物取扱の図絵、其他古代の郵便に関する物品を始め、欧米諸国の郵便用器具等にして参考とするに足るべきものは、悉く之を陳列して公の観覧に供し、以て本事業に対する智識開発の補助たらしめん事を望む。其位置の如きは何処にても可なり。或は便宜教育博物館等現在のものの一部を假りて之に充つるも可なり。要するに余の希望するところは只郵便事業の一斑にても之を公衆に開放了知せしめんと欲するにあり。

「天野生」の論旨をまとめると以下のようなになる。欧米諸国では人民が郵便局の活動に常に注意を払っており、郵便吏員は社会的な尊敬を受けている。これは、郵便事業の意義に対して当局が「事業の性質状況等を世人に公示」しているからだ。一方、日本では事業開設から日も浅く、郵便を「三十年前の飛脚」と同一視して信用をおかない者が多い。政府において「本事業の性質状況を一般世人に了知せしむるの一手段」として郵便博物館を設置すべきだ。

ここで、博物館設置の目的として強調されているのは、政府が行う郵便に対する「一般世人」の認知と事業の社会的位置付けの向上である。そのために「諸般の器具機械式紙、切手、郵便物取扱の図絵、其他古代の郵便に関する物品を始め、欧米諸国の郵便用器具等にして参考とするに足るべきもの」を公衆の観覧に供すべきだ、というのである。事業の内容を眼で見られ

7 天野生「郵便事業に対する希望」、『交通』8(77)、交通雑誌社、交通学館、1894-03。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1539093> (参照 2025-11-26)

る形で公開してゆけば、人々の理解も進むだろう、という逓信行政側の啓蒙的な意図を読み取れる。

続いて、1896年には、逓信省の職員であった岩崎直英が、「逓信博物館と逓信書籍館の設立を望む」という論説を『交通』に載せた⁽⁸⁾。

岩崎直英は富山藩士の家に生まれ、維新後にフランス語を学んだ。逓信省に入り、1890年にパリで開かれた世界電信会議の代表団に随行した後、しばらく欧州に滞在して見聞を広めた。帰国後は芝公園にあった東京郵便電信学校で、逓信省職員の教育に携わった。1893年に刊行された著書『郵便行政論』は、総合的な郵便行政の教科書として、広く読まれたようである。1895年には同校教授に任じられている。日清戦争が起こると野戦郵便局の業務を主に手がけるようになり、その後は朝鮮など植民地における逓信事務を専らとした⁽⁹⁾。滞欧中の岩崎は、逓信事業の一環として博物館・図書館の活動を目にしたにちがいない。省内の人であるから、すでに当時立案されていた博物館創設の後押しをする意図のある記事かとも考えられる。岩崎の論旨を要約すると、次のようなものである。

我が国の郵便電信事業は短期間で発達したが、その制度はもちろん器具器械に至るまで欧米の「模倣反訳」である。新しい発明発見を「奨励涵養」し、「斯業に於ける知識を発達」させようとするならば、(1)「内外に於ける斯業の制度、器具、器械等の沿革及現状を明かにするの方便」を与え、(2)「有益なる発明発見又は創意あるに於ては相当の保護を与へ以て其實行を助け」、(3)「其発明発見又は創意にして称するに足らざるものと難も當局者之を歓迎して其進取の志を振励」する必要がある。(2)(3)は当局の姿勢の問題であるが、(1)を実行する手段として逓信博物館・逓信書籍館の設立を望む。逓信事業において過去や現行の器具器械の保存は「温古判断の方便」であり、欧米諸国では実行されている。我が国でも「東京に逓信博物館を設け陳列するに新古内外の器具器械は勿論古来の信書、封筒、各国新旧の郵電切手数下等員新旧の服装に至る迄一切の参考品を以てし日に公開して参看自由たらしむるに於ては」、事業にとって有益であろう。また、博物館と併せて書籍館を設置し、外国新聞雑誌等の記事の翻訳・要約を提供すれば関係者に役立つであろう。さらに地方勤務の職員に新知識を与えるために地方一等局にも書籍館を設けることが望まれる。

この論説で強調されているのは、先の「天野生」とは異なり、逓信事業を執行する側での内部業務改善に資するための施設としての博物館・図書館である。これまでの事業で使われてきた用具、外国からもたらされた新しい器具・機械、さらにそれらに関する情報としての書籍類などを蓄積することによって、将来の事業の改善に役立たせようという方針が導かれている。ここで、博物館と併せて図書館の設置を求めている点が注目されるが、この点については博物館の運営形態とも関連するため、後述する。

「天野生」と岩崎の意見は、それぞれ博物館に課せられた「資料の収集と公開活用」という二つの社会的課題を捉えており、この両側面を充実させることが、逓信事業の円滑な推進と発展に結びつくという強い確信が感じられる。前章で見たように、逓信省の有力な幹部の中には、すでに欧州の逓信事業に関する博物館の状況を実地に見た者がいたので、このような逓信省内や

8 岩崎直英「逓信博物館と逓信書籍館の設立を望む」、『交通』14(139)、交通雑誌社、交通学館、1896-10。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1539153> (参照 2025-11-27)

9 岩崎さち「故、義父・岩崎直英について」、『岩崎勝直遺稿集』、岩崎さち、1982.12。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/12615583> (参照 2025-11-27)

周辺の意見は単なる机上の論ではなく、博物館の設立自体に大きな障害はなかったと見てよいだろう。問題はどのような博物館を、どのような運営形態で立ち上げるかということであった。

4 郵便博物館の設立

(1) 博物館の資料収集と設置形態

博物館の設立準備の経過を示す史料はほとんど残らないが、これまで見てきた経緯から、通信省内で博物館の設立自体を否定する意見はなく、事業内容の改善と事業の周知の両面から、その必要性が認められていたことは明らかである。では、設立のためにどのような資料が収集されたのだろうか。この点は、郵政博物館に残る1900年の「郵便博物館陳列品原簿」⁽¹⁰⁾から、コレクションの方向性の一部を推測することができる。小論では詳細な分析には至らないが、基礎史料としてその概要を示す。

「郵便博物館陳列品原簿」は、袋綴装、板目表紙の一般的な簿冊で、表紙には「明治三十三年六月（朱書）『内國之部』 郵便博物館陳列品原簿 通信省通信局郵務課」とあり、「郵便博物館図書」のラベルが貼付されている（図1）。凡例等はなく、1丁目から目録本文となる。用紙は「通信省」の柱題がある朱刷の罫紙で半面13行。記載の多くは墨書だが、一部に朱書を交え、番号はスタンプを用いている。

目録本文の記載の形式は大きく二つに分かれ（以下「前半」（図2）、「後半」（図3）という）、冒頭から10丁の前半は「所轄」「種類」「員数」「摘要」の4項目を記載するのみだが、それ以降の後半は、行頭にスタンプで連続した番号を捺し、1行の中に様式にとられない形で、品名、員数、取得元、資料の所在場所などを記述しており、「原簿」と名付けられている割には、かなり雑然とした記載である。陳列品自体の他に飾箱（展示ケース）や椅子・衝立など什器の記述もあるので、あるいは正式な原簿を編製する際の点検作業中の状態を示すものかもしれない。

前半には、各郵便電信局の図面や写真・郵便函（ポスト）の見本・旧幕府道中奉行所から引き継いだ「五海道其他分間延絵図」・ベルリンの郵便博物館に出品した「郵便取扱の図」の控・1893年にシカゴで開催されたコロンブス博覧会に出品した「郵便現業の図」稿本・職員の制服や装備など約250件程度の記載がある。1件の中には複数の物品を含むものがあるので、資料の実数はこれをかなり上回る。

後半はスタンプの通し番号がNo.1からNo.616の行まで記載があり、以降はNo.934まで空行である。記載された資料の類型として数が多いのは、内外の通信事業の様子を撮影した写真で、200点以上があり、いずれも被写体につい

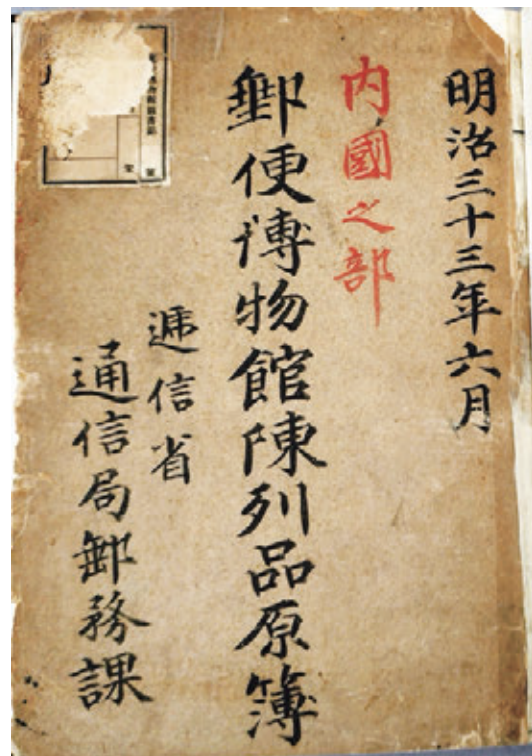


図1 明治三十三年六月 郵便博物館陳列品原簿 内國之部

10 郵政博物館所蔵資料、AL-A-3

具の現品、標本などを収集すべきである。現在、通信事業の参考品は通信省書房（図書室）、郵便電信学校（郵電学校）、博物館の3か所に分かれて保管されているが、これをまとめて郵電学校に属する博物館・図書館とすれば通信官吏の教育にも役立ち、また専門家である同校の教官が取り扱える。

すなわち、博物館・図書館とともに郵電学校に所属させれば、本省の庁舎難が解消され、資料の集約によって学生の教育に役立ち、その取り扱いが専門家である教官が担える、というのである。一雑誌からの気楽な提案のように見えるが、実はこのように論じられる状況が、当時の通信行政内に存在した。

『通信省第十四年報』（1901年）に次のような記事が見える⁽¹¹⁾。

第二十二章 東京郵便電信学校

（中略）

校舎新築 本校々舎は旧寺院の建物を充用したるものなれば、室内の区画及び採光上の関係等に於て不適當の点尠からず。従来種々修理を加へ、辛ふして授業を為すことを得たりと雖も輓近通信機関の増進に伴ひ、枢要の学科を増設し、生徒を増員せしを以て、教場の狹隘を告ぐるに甚だしきに至れり。於是、校舎の改築、図書庫・図書館・寄宿舎、其他教授用器具機械類の整備を企画し、先づ本年度に於て本館木造二階建三百七十七坪・附属家木造平家建五十五坪五合を有する校舎、煉瓦造二十四坪を有する図書貯蔵庫及木造平家建百十七坪を有する図書館を建築し、悄悄設備の一端を全ふすことを得たり。

郵電学校は、1900年に校舎と図書館・書庫を新築していたのである。さらに、翌年の年報には、

図書館は内部の準備全からずと雖も、本館の開否は教育上影響する所鮮少なからざるを以て、在来の器具を繰合せ仮に開設し、図書館規則を設け、生徒は勿論、卒業生其他本校に縁故ある者に閲覧せしむることとせり。⁽¹²⁾

との記述が見え、準備が整わない中で制度を整えて、閲覧を始めたことがわかる。『交通』社説の中に「殊に博物館及図書館の基礎は既に同校に形成せられつつあるを聞く」と言及されているのは、おそらくこの点である。

やや想像をめぐらせるならば、郵便博物館の設置に当たっては、所管の部署をどこにするか議論があったことが考えられる。博物館資料を通信官吏に対する教育の素材と見れば、郵電学校に博物館を置くのは一案である。実際この時期、東京高等師範学校附属の教育博物館や、東京高等商業学校の商品見本陳列所といった先例があった。一方で、資料は現業部門の業務改善の材料で、これは博物館設立の一つの根拠として論じられた。結局、郵便博物館の業務範囲を決めた1903年12月8日改正の通信省分課規程では「通信事務参考用品の保存整理に関すること」「郵便事業用具の学術的研究並びに応用に関すること」という二つの事務を担当する、通信局管下の課相当の部署として位置付けられたのである。

ここで、以前に岩崎直英が博物館とともに「書籍館」＝図書館の設置を併せて提言していた

11 『通信省年報』第14、通信省、1901。p. 467 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/805336> (参照 2025-11-27)

12 『通信省年報』第15、通信省、1902。p. 223 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/805337> (参照 2025-11-27)

意味について一言しておきたい。現在では博物館と図書館とは、別の機能や制度を持つ施設として認識されるのが一般的だが、たとえば大英図書館 British Librayが1970年代まで大英博物館 British Museumの管下にあったように、また明治初期の博物館が一組織として「書籍館」（後に「浅草文庫」）を有していたように、博物館と図書館の機能が共存する施設運営は、明治期では不自然なことではなかった。岩崎が両施設を併記したのも、『交通』の社説が博物館・図書館を併せて考えたのも、それほど特異な発想ではないのである。

1905年に至って、通信省本省の新庁舎建設が始まると、郵便博物館は郵電学校の後身である通信官吏練習所の構内に一時移転することとなった。短い間、博物館と図書館が隣り合う時期が生じたが、組織としてまとまることはなく、1910年に至り博物館は木挽町の通信省新庁舎内に戻っていった。

(2) 開館当初の展示

1902年に郵便博物館が正式開館した際に開催された展覧会については、『万国郵便連合加盟25年記念展覧会出品目録』に展示室の平面図と一部の出品物の目録が記載されている。また少数であるが写真が残っている。さらに『読売新聞』⁽¹³⁾と『交通』第276号⁽¹⁴⁾には、展示を一覧した記事が掲載されており、展示の概要と観覧者がどのような展示品に関心を寄せたかを、うかがうことができる（表2）。一般市民の視点に近い『読売新聞』と、事業の専門家が見ている『交通』とでは、着目点に多少の差があるのも興味深い。ここでは展示室の雰囲気をよく伝える『読売新聞』の記事の全文を示す。原文中の図は省略した。

「通信省内の郵便博物館」

（第1回：6月22日）

所謂降りみ降らずみの五月雨時で、一昨日帝国ホテル内の万国郵便聯合加盟廿五年記念祝賀会も、此霖雨の為め折角の趣向を流して了やアせぬかと案じたが、久振の蒼穹を眺める事も出来て、日比谷で上げた花火の音も勇ましく聞かれたのは、天も此紀念会に同情を寄せたかとも疑われて、記者も「郵便万歳!!!」を三呼するを、躊躇しなかった。

で、其翌日から五日間通信省内に、郵便博物館を開くといふから、郵便物ではないが早い勝ち!と、其の第一日=昨日の午前同館を一覧して、所感…も些と大業だが、少しく述べて見る。

場所は通信省の通用門内に入った、直ぐ左手の二階建てで、階上を外国、階下を内国の部と分つて、全世界に於ける交通機関に用ゐる有らゆる種類を一堂に蒐集陳列してあると謂つても、先づ不可なしであるが、階下の室に入った正面に、現今の郵便局を假設してあつてカンカンに載せてある小包の名宛を見ると、織田信長殿と記してあつたのは、堪く嬉しかつた。

其から奥へ進む程時代を遡らせて日本交通の活歴史を、目に睹るが如くに陳列して危く千両箱と間違へさうな状箱や、梟首の高札の親分とも謂つべき駄馬の制札杯もあつて、一昨日の紀念会席上通信大臣の演説中にもあつたか、是等の列品を見ると全く隔世の感さへ起つた程で、世の中に是程進歩して行く制度はなからうとさへ思はれたのである。

此所に一々列品に就いて記述して行くのは、余りに管々しいので、蝦蟇口と郵便函の変遷

13 「通信省内の郵便博物館」、『読売新聞』1902年6月22日、24日掲載。郵政博物館所蔵「万国郵便連合加盟25年記念祝典書類」（AA-A 39、40、41）所収の切り抜きによつた。

14 素蛾生「郵便博物館」、『交通』28(276)、1902-06。

	読売新聞	交通 276号
1 階 (内国)	現今の郵便局を仮設	現今郵便局窓口の有様
		国内国外の郵便局の標札
		往昔の駅伝より郵便制度開始前までの道中飛脚の模様、并に通信に関する器具器城
	状箱	
	制札	
		北海道で用いる遞送用具 (喇叭、アツシ、藁靴)、遞送中のアイヌ写真
		創業時代より現行までの郵便切手、封皮、式紙などの標本
		内地は勿論台湾までの凡て郵便に用ゆる器具器城
		遞送集配人の帽子や服装 (帽子: 創業時代に於ける葎山笠から現今の独逸帽に至る迄)
	蝦蟇口 (郵袋) の変遷	
	郵便函 (ポスト) の変遷	我邦第一期の郵便函
	山陽鉄道会社の郵便車雛形	
		(明治) 二十九年洪水中郵便物を集配する困難なる図画
	山間僻邑に於ける交通機関の雛形	
階段室		欧州諸国の郵便局や、郵便馬車などの写真
2 階 (外国)	独逸聯邦其他諸外国の鉄製郵便函	
	洪牙利商務省の寄送に係る新式郵便函	洪牙利商務省の寄送に係る新式郵便函
	印度郵政庁の円錐形の鉄製郵便函	印度郵政庁から寄贈の郵便函
	全世界の郵券や端書の各種	
	各国郵便局の日附印	
	独オスカルスベルリンク製造所製の「顕時押印器」	独逸「オスカルスベルリンク」製造製の「顕時押印機」
		壤地利写真ブレチン郵便電信局受付口の写真
	集配人の制服制帽	
	加奈太郵政庁の防水布上衣	
		印度郵政庁から寄贈の野外遞送の摸型 (砂漠や水上の遞送)
		十六世紀時代歐洲に於ける信書送達の銅版画
	電信機諸種	電信機、電話機の幾百種

表 2 報道に見える開館当時の郵便博物館の展示構成

を図に示して置くに止めて置くが、是等の図を見ても、郵便事務の進歩して行く順序を知るに足るので、(一)は創業の際郵便物の集配に使用し、環に真田紐を付け、肩に懸けたもの。(二)は其の第二期、(三)は其の第三期と、漸々に完全の域に進むだので、現行の蝦蟇口は全く是等が進化したので、次の図は事便箱の変遷を示すが、是亦面白い歴史を有つて居るのは、読者が見る目に映る事であらうと信ずるのみか、我人共に古い記憶を新たに喚起するのは、愉快であらう!と、紙の上に記して置く。

日本に於ては嚆矢の名譽を荷ふ山陽鉄道会社が、其汽車進行中に郵便物を受授する雛形やら、山間僻邑に於ける交通機関の雛形杯が陳列してあつて、都人の目には至極面白く、交通

の発達を奨励する為に、如何に力を尽すかが、能く解る。

却説是から階上一外国の部へ歩を移すと、記者は再び隔世の感に堪へなかつたが、是は号を改めて書き続けやう。

(第2回：6月24日)

是から階上「外国の部」を紹介する順序になつたが、階子段を昇り切った処に独逸聯邦其他諸外国の鉄製郵便函の見本が陳列してあるが、何を見ても其の装飾の美、其の構造の精、近来市下の或部分に見掛ける赤い筒も、却々其の足下にも立てぬ程で、就中洪牙利商務省の寄送に係る新式郵便函は図に示す如く、配達夫が蝦蟇口を其下に嵌め込むと同時に、函の底が自然と開いて、蓄つて居る郵便物が残らず蝦蟇口へ落ち、其れを引出すと。堅く錠が下りる装置になって居るが、此種の郵便函を用ゐると、配達夫が函中の郵便物の多寡は素り、全然手さへ触れる…否、見る事さへ出来ぬのだから、是程安全なのはないので、比一事を見ても、外国の諸政府が如何に信書の秘密を重んじて居るかの一斑を、知るに足るので。

次に図するのは、印度郵政庁の出品に係り、是は円錐形の鉄製郵便函を吊してあるので、配達夫は郵便函全体を持去った後へ、又空のを懸けて置く装置になって居て、至極便利のやうに想はれる。

愈よ室内へ歩を進めると、全世界の郵券や端書やの各種は、其々国別にして浴く蒐集してあるのは、世のフキラテリストが垂涎の種なるべく、数多の観覧者中には、低徊去る能はざるかの如き人々もあつた。

次に記して置きたいのは、各国郵便局の日附印の見本で、是亦何を見ても巧妙に出来て居て、其中でも独オスカルスペリンク製造所製の「顕時押印器」の如きは、印の上部に真物の時計が挿むであつて、此印を捺す時は、何年何月午前、後何時何分迄の精密なる時間を、紙上に現し出すので、是で件の時計が狂はぬ以上は、決して虚偽の時刻を印する事は出来ぬが、其他郵便局員の出勤及退出時間を精確ならしむる為め、或紙片に其姓名を記し、其の機の把手を一転すれば、姓名の上に其の時刻を印する自動機もあつたが、現に諸外国の郵便局で使用しつつある日附印を見ると、大半は鋼鉄製の上等で、是では誰が捺しても、其時間は素より其局名さへ全で不明瞭な或国の実例を真似る訳にも行かぬやうに信ぜられて、交通機関が殆ど其生命とする時間を、如何に重んずるかも知れて、記者は羨しさに堪えぬのであつた！

集配人の制服制帽も陳列されてあるが、加奈太郵政庁の出品した防水布上衣などの立派さは、信使は一に紳士を作るとも謂つべく、我が国のとは余程の距離があるやうに感ぜられた。

此の外電信機の諸種も陳列されてあつて、何人も一度は実見して置かねばならぬもののみで、吏員の語る所に拠ると、現在の場所では如何にも狭隘であるから。何れ適當の位置に移して、広く衆庶の観覧にも供するさうだが、記者は一時も早く此郵便博物館が公開されるの日を、今より指折り数へて待ちつつ、茲に筆を擱く。

初めての来館者に、維新以来の郵便事業の発達を示す資料や、欧米の機械や制服など最新資料が目をつけたのは当然であるが、状箱や駄馬の制札など近代郵便以前の資料も、歴史を追う形で多数展示されている。展示を構成した職員たちは、ベルリンの郵便博物館において、ドイツ統一以前の帝国郵便や、ヨーロッパ諸国の通信事業に関する展示が充実していることを、意識していたにちがいない。産業振興を主題とする博物館のコレクションに、前史というべき分野の資料が加えられるのは珍しいことではないが、郵便博物館もまた、近代郵便という制度の広報普及や事業運営の参考だけでなく、古代以来の日本の交通通信の発達をふりかえるのが主

たる任務の一つだという方針をとっていたことが、明らかである。

5 近代博物館史の中の郵便博物館

以上、郵便博物館の創設に関して、主に逓信省関係者の証言や記録をもとに、その過程をたどってきた。むすびとして、日本近代の博物館史の中で、郵便博物館がどのように位置づけられるかを概観したい。

欧米諸国における「博物館」という公共施設の存在は、幕末期の遣外使節による見聞や洋書の翻訳によって、日本人の間で知られるようになった。また、国内に博物館を設けることが、近代化の要件の一つであることも、留学や外遊を通じてその実態を見た明治政府の官僚たちの共通の認識となった。

明治政府による博物館の設置は、複数の官庁によって構想され、その時々歴史的な条件によって、さまざまな形態で実現し、あるいは実現しなかった。1872年、町田久成と田中芳男を中心とする文部省博物館が湯島聖堂で博覧会を開催した。1875年、この博覧会での収集を基礎に後の東京帝室博物館→東京国立博物館の起源となる内務省博物館管下の「博物館」が、東京・内山下町に開館する一方で、文部省では教育関係資料を収集公開する専門博物館を計画して別に博物館を設立、1877年に「教育博物館」となった。こちらは歴史的な曲折を経て、国立科学博物館につながってゆく。

内務省所管の博物館は1881年に農商務省に移管され、上野の現在地に移るが、1886年には宮内省の管下となり、「帝国博物館」と名称を改めた時期以降、その収集や展示も産業振興から、日本・東洋の古美術作品を主な収集・展示対象とするようになった。

明治前期の博物館で見落とせないのが、軍事博物館である。現在まで続く「遊就館」は、「掲額並古来の武器陳列場」として1877年頃から構想が始まり、1881年にはイタリア人美術家カペレッティの設計になる西洋城砦風の建物が竣工している。靖国神社に付属し、事実上、陸軍が管理していた。その後、遊就館は、軍事技術の発達の成果を内外に広報するとともに、日清・日露の二度の対外戦争を経て多くの戦利品を加え、軍事大国となった日本の国力を誇示する施設となってゆく⁽¹⁵⁾。軍事博物館としては、遊就館が著名であるが、海軍も日露戦争後の1908年に「海軍参考館」を築地の海軍大学校内に設けている。これは三井家の寄附金を原資として建設され、鉄骨・煉瓦・コンクリート2階建、延床面積約750坪(2470㎡)という、本格的な施設であった⁽¹⁶⁾。

1891年には、産業振興を目的とした博物館として、神宮(伊勢神宮)が運営する「農業館」が三重県に開館した。設立の趣旨文には、国民は神宮を農事の祖と仰いでいるので、神宮が農業館を設置し、「農作、種樹、漁獵、牧畜、養蚕類の産物並製品及器具、各類の標本摸形等を蒐集陳列し、傍ら図書統計表其他農書を収蔵して農家の観覧に資す」と述べられている⁽¹⁷⁾。農業館の開館には、1889年に上野の博物館が帝国博物館として改組された際に、その地位を失った田中芳男が深く関わっていた。

15 靖国神社 編『靖国神社誌』、靖国神社、1912。186-187丁、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/3436712> (参照 2025-11-27)

16 渡辺譲「海軍参考館」、『工業之大日本』5(8)、工業之大日本社、1908-08。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1894382> (参照 2025-11-27)

17 田中芳男 編『農業館列品目録』、神苑会、明33.3。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/839228> (参照 2025-11-27)

また、商業や貿易に関する博物館が必要ではないかという議論が1880年代に政府内で起こり、外務省・農商務省・文部省の間で「通商博物館」の設立が検討された⁽¹⁸⁾。すでに1885年には東京商業学校（後の東京高等商業学校→一橋大学）内に「商品陳列所」が開設されていたが、政府レベルの施設を作ろうという計画である。結局この案は実現しなかったが、1896年に農商務省の組織として貿易品陳列館（後に商品陳列館）が発足し、関東大震災で建物と所蔵資料を失うまで活動した。ちなみに一ツ橋にあった東京高等商業学校商品陳列所も関東大震災で所蔵品が全滅している。

なお、逓信省の所管であった鉄道事業は明治後期に分離されて、1908年に鉄道院となるが、ここでも1911年には「鉄道博物掛」を設けて資料収集を始め、1921年の「鉄道博物館」の設置につながっている。

このように、明治時代前期には政府や政府に近い組織が、さまざまなタイプの博物館を構想した。構想のみに終わった場合もあったが、かなりの数が実現しており、当時の政府において、博物館の設置が行政の遂行にあたって必要な施設と認識されていたことがわかる。

産業や教育に対する実務的な知的資源集積の場としての博物館・図書館は、明治初期には総合センターとして位置付けられた上野の博物館が、帝国博物館→帝室博物館となって、その運営方針を美術中心に絞り、それ以外の分野のコレクションを切り離してゆくのと前後して、それぞれの分野で順次、独自の構想で計画、設立されていった。郵便博物館も、およそこの歴史的な流れに乗って構想され、実現したと言える。

注目されるのは、逓信事業に関わった人々が博物館に対して、単に制度の改善や技術の向上を実現するための素材を求めただけではなかった点である。「郵便と美術」の論述では、事業に対する認知と社会的地位の向上を実現するためには、美的な訴求力が求められるという意識が、如実にうかがわれる。これはおそらく、欧米の逓信事業の実態を目の当たりにした幹部職員たちの共通の見方であったであろうし、郵便・電信電話という国際的なコミュニケーションを担う立場としては、より強く感じられたにちがいない。この点が、その後の歴史の中で、切手、葉書、ポスターといった媒体のみならず庁舎建築に至るまで、逓信事業が社会に向き合う中に、美的な要素に対する配慮が多く見受けられるという特色の淵源となり、そこに博物館は大きな役割を果たしたのである。

（たらしま さとし 東京文化財研究所客員研究員）

18 三宅拓也「明治期の通商博物館設置計画にみる商品陳列所の受容」2021、『博物館学雑誌』36-2。